

薬禍による障害は

被害者とその家族や周囲の人びとに

何を背負わせてきたのか――

告訴から和解まで「十年裁判」の経緯をふくむ

サリドマイド事件の全容をえがきつつ、

今日もなお一人ひとりにのしかかる

苦しみの重さをおしはかる。

この人びとの明日は、

どのようにひらかれるのであろうか。

サリドマイド禍の人びと

宮本真左彦

重い歳月のなかから

ちくま
ぶっくす

サリドマイド禍の人びと

重い歳月のなかから

宮本真左彦

ちくま
ぶっくす

宮本真左彦 (みやもと まさひこ)

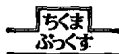
1945年、埼玉県に生まれる。

早稲田大学文学部卒業後、週刊誌、月刊誌の編集者を経て、現在、フリーのルポライター。

サリドマイド禍の人びと——重い歳月のなかから

1981年12月20日 初版第1刷発行

Printed in Japan



37

著 者 宮 本 真 左 彦

発行者 布 川 角 左 衛 門

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

101-91 東京都千代田区神田小川町2-8

振替 東京6-4123 電話 東京(291) 7651(営業)
(294) 6711(編集)

0347-05037-4604 ©Masahiko Miyamoto 明和印刷・和田製本

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担でお取替えいたします。

目次

サリドマイド禍の人びと 重い歳月のなかから

第一章

薬禍を負って 3

事故死した二人の高校生 4

あざけりの視線 8

追いつめられた父 11

幼い心にのしかかるもの 14

第二章

サリドマイド症候群 19

被害の実態 20

行政の空白があった 26

親たちの団結 32

レンツ博士の証言から 34

離婚への道すじ 43

第三章

憎悪のるつぼ 49

「毒性、副作用がほとんどなく……」

冷厳な事実のまえに 52

憎しみだけが残った 56

捨て身の抗議行動へ 60

真実を知りたい 64

長い煩悶の時 67

先発訴訟——大日本製薬への挑戦 72

生命と引きかえに得た真実 76

第四章

十年裁判 79

生存権がおかされている 80

『手弁当』の弁護活動 84

因果関係の立証へ 90

梶井グラフが明示したもの 93

厳格責任論による追及 98

苦闘 103

追いつめられた国と企業 108

「約束を守って！」 114

第五章

うちすてられて 117

失踪騒ぎ 118

療護園での日々 122

「父親はおれだ」 127

途絶えた糸 138

第六章

重い歲月 145

終わったはずの薬禍が 146

重複障害 152

暗転 157

「涙の春」をむかえるとき 161

第七章

父親誕生 165

「手はどうもないよ」 166

熟睡感をもとめて 172

祖母の手で育つ 174

十年目の真実 179

ありふれたドラマのように 183

結 章

苦渋のなかから 191

保母としての出発 192

“私は日本が大きらい” 194

正義は行なわれるか 196

参考資料 199

「レンツ警告」から二十年
インタヴューへの

サリドマイド事件年表 208

おもな参考文献 217

あとがき 218

サリドマイド禍の人びと

重い歲月のなかから

第一章

藥禍を負って

事故死した二人の高校生

昭和五十五年（一九八〇）、群馬県前橋市と香川県大川郡志度町^{しど}で、高校生が二人、事故のために急逝した。

全国共通一次試験を二日後にひかえた一月十日、群馬県立前橋高校三年・北林保広は、いつものように朝八時十五分に家を出て学校へと向かった。彼の母・たまは、市内下大島にある上毛病院に看護婦として勤務している。八時には車で出勤しなければならぬたまは、その十五分後に出かける長男・保広と次男・一生、それに三十分後に出勤する主人・保の三人分の弁当をつくり、食卓の上にそろえて出かけるのが習慣となっていた。保広は、この朝も母の手づくりの弁当を通学鞆の中に入れ、自転車に乗って元気に出かけて行った。

前橋高校は、前年五月に新校舎が下沖町に完成、移転している。旧校舎は、保広の自宅から歩いて五分とかからぬ同じ文京町内であった。だが高校が新校舎に移転したことにより、通学時間は自転車でも十五分はかかるうえ、その通学路は両毛線と交わっており、前橋駅と駒形駅間の第二天間踏切を渡らねばならなかった。保広が家を出て、この第二天間踏切にさしかかると、ちょうど伊勢崎八時十四分始発の高崎行普通電車の通過にぶつかる。この電車は、毎朝定刻よりも遅れて通過するのが常だった。警報機だけで遮断機のないこの踏切は、電車の通過を待ちきれぬ高校生が、きわどい危険を冒して渡っていた。

保広が自宅を出て数分で着く踏切は、ゆるい下り坂の途中にある。この日も、踏切の警報機はいっ

ものように鳴っていた。電車の通過を待ちきれぬ同級生が、遅れを見こして足早に渡っていった。彼もまた毎朝そうするように、友人の後につづいて線路に身を乗り出したのである。

だがその瞬間、彼の体は大きな衝撃を受け、自転車とともに大地に叩きつけられた。即死であった。この日、皮肉なことに電車は定刻どおりに踏切を通過しようとしたのである。また後日、母・たきが事故の起こった同時刻に現場を訪れて判明するのだが、射してくる朝日の輝きに眩惑されて、電車の進行してくる方向が死角になってしまふのだった。

事故直後の八時二十五分、保広よりもやや遅れて家を出た弟・一生が踏切に着き、兄の事故を知る。一生は、さっそく近くの友人宅の電話を借り、家に事故の連絡を入れた。この一生の連絡を受けたのは、そろそろ出勤しようとしていた父である。「お兄ちゃんが、電車にはねられた」というだけの短い会話であったが、父は直感としてすでにある覚悟を決める。そして、この事故の報せはさらに父から上毛病院の母のもとへ送られる。

病院の母はまだ着いたばかりで、更衣室で白衣に着替えている最中だった。電話の呼び出しを受け、夫から保広が事故に遭ったということを聞かされたとき、母はまだ事態を深刻に受けとめていなかった。どの程度の負傷なのだろうか……と。

だが、急遽事故現場にかけつけた母は、冬の朝の寒気のなかに横たわっているわが子の亡骸なきがらと対面することになる。検死を終えた救急車は、亡骸を現場に置いたまま立ち去ろうとしていた。父は、寒気のなかにわが子をさらしておくのは忍びず、去ろうとしていた救急車に懇願して、保広を暖いわが家にまで連れもどす。事故の後、逝ったわが子に対して両親ができたそれが精いっぱいの手向けであったのであろうか。

香川県の志度町は、高松市から東に二十キロほど寄った小さな町である。北林保広が不慮の事故死を遂げてから約六カ月後、ここでもまた一人の高校生が事故で逝った。

期末試験の最中であつた。六月二十八日、土曜日。香川県立石田高校三年・森岡秀行はこの日、苦手な数学の試験を終えて、中休みとなる翌日曜日をどう過ごそうかと考えていた。この昼過ぎ、田へ耕作に出かけようとしていた父・正男は、遊び友達の誘いを試験で疲れているからと断わっている秀行の姿を、庭で見かけている。父にとって、元気な秀行の姿を見るのはこれが最後となるが、もちろん父にはそんなことを知る由もない。

母・美紗子は、屋島総合病院の看護婦である。この土曜日の勤務は、午後四時半から深夜十二時半までの遅番に当たっていた。いつも遅番のときには、志度から二時四十分発のバスに乗り、たつぷりと時間の余裕をもつて出かけている。しかし、この日だけに限って母は、三時三十一分のバスでギリギリの時間に出勤した。秀行の虫歯が腫れて痛みがひどく、おかゆでなければ食べられないほどだった。それで、彼のためにおかゆを炊いておかなければならなかったのである。

田へ出かけていた父は、いったん帰宅するが、夕方六時から十時まで予定されている少年野球チームの指導に出かけてしまう。こうして、家には秀行をはじめ弟の高明、光彰と妹の加奈子の四人が残される。そして秀行は、やがて電話で友人からの誘いを受けて、同じ志度町内にある友人のアパートへ出かけて行くのである。

父は、母が遅番勤務のときには、帰りのバスのない母のため、いつも車で病院まで迎えに行っていた。この晩も、野球のコーチから帰った父は、往復二時間の道を運転して母を迎えに行っている。そうして家に着いたのは、深夜二時のことであつた。

この土地の男たちは、酒が好きであり、また強い。父・正男もそんな土地の男の一人で、この晩、帰宅してから母を相手に遅い晩酌を傾けた。だが、いつもは量が進むはずのビールが、この日に限ってコップ一、二杯がやっとだったという。しかも、妙な気持ちの苛立ちさえ覚えた。それは、相手をしていた母も同様であつたらしい。

床に入ってから何度か寝返りを打ちながら陥つた父の眠りを、電話のベルが醒ましたのは、朝四時二十五分であつた。「事故でモンバが病院に運ばれた」。秀行のことを、ニックネームで呼んでいることから、学校の友人からの連絡であることがわかつた。喉を引きつらせた声のようすで、事故の結果がただならぬものであることを察した父は、さっそく母を叩き起こし、秀行が救急車で収容された志度町の疊病院へ車を飛ばした。

友人の間でモンバというニックネームで呼ばれていた秀行は、その夜友人のアパートに集まつたグループに加わり、徹夜で遊んでいた。そして早晩、自動販売機で買物をするため、六人がバイクに分乗して志度町から国道11号線を高松方向へと向かつたのである。事故が起きたのは、その途中であつた。

彼らの乗つた数台のバイクと並行して走っていた一台の乗用車が、牟礼町のカーブにさしかかつたとき、路肩に停車しようとしたためか、左側に車を寄せてきたのである。乗用車の直後を走っていたのは、T君とその後に行秀行がまたがって乗っていたバイクであつた。休日の早晩であり、通行する車もまばらな国道を、制限時速をはるかに超えるスピードで走っていたT君のバイクは、路肩に寄せてきたその乗用車を避けきれず、激突した。その衝撃の激しさは、後にまたがっていた秀行の体が十メートルも飛ばされたほどであつたという。即死であつた。

疊病院に駆けつけた彼の両親は、担架で運ばれる秀行の姿を見ている。担架から片手をダラリと下げたわが子は、まるで今にも起き上ってくるように思えたという。しかし、その想いは所詮空しい想いでしかなかったということをすぐ思い知らされることになる。

こうして、異なる土地で異なる時に、二人の高校生が逝った。二人は、これまで顔を会わせたこともなければ、名前も知らなかった。だが、お互いに見知らぬ二人は、非常に重要なあるものを背負っていたのである。それは二人が生まれてからしばらく経って診察した医師が、こう記しているのである。北林保広については、「右側第一中手骨欠損、左側第一中手痕跡、前腕左右短縮、肘関節左右低形成、橈骨右欠損、橈骨左痕跡……」。森岡秀行については、「両側拇指欠損、両側内反手、左三角筋形成不全、両肘関節運動制限、前腕左右短縮……」。二人は、ともに酷似した上肢障害を背負っていた。しかも、その障害は昭和三十六年（一九六二）から三十七年にかけて、世界中の耳目を集めた、サリドマイド剤に起因するものであった。北林保広と森岡秀行は、当時「エンゼルベビー」「あざらし子」などという名を冠せられたサリドマイド被害児だったのである。

あざけりの視線

北林保広の誕生日は、昭和三十七年二月六日。森岡秀行は、同年六月二日。わが国において、大日本製薬が製造販売したサリドマイド系睡眠薬「イソミン」、同胃腸薬「プロバンM」が、奇形児発生の原因になると大騒ぎになった渦中で、二人は生まれている。

北林たまは、結婚して間もなく保広を身ごもるのだが、初めての妊娠であると同時に日ごろからの胃弱の故に、悪阻つづをそれとは気づかない。そんなとき、たまたま勤務先の病院を訪れていた製薬会社の販売員が、よく効く胃腸薬だといって勧めたのがプロバンMだった。彼女が飲んだのは、たったの二錠である。それがどんなおそろしい結果をもたらす薬であるか、そのときの彼女にはとうてい知る由もない。

やがて、群馬中央総合病院でたまは、保広を出産、待ち望んだ初子に障害のあることを聞かされ、初産の喜びが失意に変わる。そして、障害児を産んだことによって、縁者の無遠慮な言葉が、産後の床にあるたまの心を刺した。保は、そんなたまを縁者の酷な言葉から守り、励ました。

だが、保に力づけられ、励まされて家に帰ってきた母と子 wait っていたのは、世間の好奇心な目である。アパート住まいの生活のなかで、近隣の人々の目と言葉を気にしながらの日々がつづく。銭湯には行かず、室内で入浴する子どもを、窓の隙間からじっと視線が窺っているということはしよっちゅうであった。夏の暑い日にも、わが子に長袖のものを着せ、他人の目を避けた。そうした日々が、親子の忍耐を超えるものとなり、保広を産んでわずか九カ月目にして両親は引越しを決意することになる。

保広を生んで母の心を刺した世間の視線は、やがて保広の心を刺すようになってゆく。それがどんなに辛いものであったか、彼が中学三年生の時に書きのこした日記にこう記している。

「……僕は、その仲間の間では特別視され、のけ者にされるのが常であった。言うまでもなくこの手のためである。彼たちが面白半分にも『手曲がり、手曲がり、小さい手』などとあざけるのに耐えきれなくて、僕はいつも墓地に逃げるようにしてかけて行った。もとよりそんなことを気にかける者